

旧中村家住宅

〔国登録有形文化財〕

幕末期の和洋折衷建築

発見のこみち
KASSAKA
勝坂

散策マップ

●旧中村家住宅●

入館無料

開館時間 午前9時半～午後4時

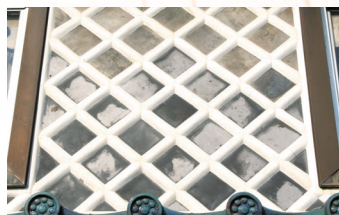
休館日(月曜日～水曜日、12月29日～1月7日)は外観のみ観覧になれます。



中村家住宅主屋と長屋門

中村家住宅主屋は、全国的にも珍しい幕末期の和洋折衷住宅です。建築当初は三階建てでしたが、関東大震災後、三階部分は取り除かれ二階建てとなっています。建築を手がけたのは鎌倉大工の石井甚五郎(いしいじんごろう)で、10年の歳月をかけ完成したと伝えられ、詳細な板図が残されています。建物の特徴は、一階の外観は和風の要素でまっていますが、二階は外壁を海鼠(なまこ)壁(※)とし、洋風の要素として軒を曲線の白漆喰で塗りこめ、正面に縦長の窓を配しています。

※海鼠壁…壁に四角い瓦を斜めにならべ、その継ぎ目を漆喰で盛り上げて白く塗ったもの。



長屋門は、桁行63尺(約19m)の長大なもので、主屋と同時期の慶応年間(1865～1868)に建設されたと推定されます。

長屋門としては一般的な形式ではありませんが、通常、柱は4寸(約12cm)角程度であるのに対して、この長屋門では5寸(約15cm)角の柱が使用されており、創建当時は豪壮な趣を呈していたものと思われます。長屋門の外壁は朱色の漆を塗った形跡があります。



式台の間と
茶の間以外は
見学できません



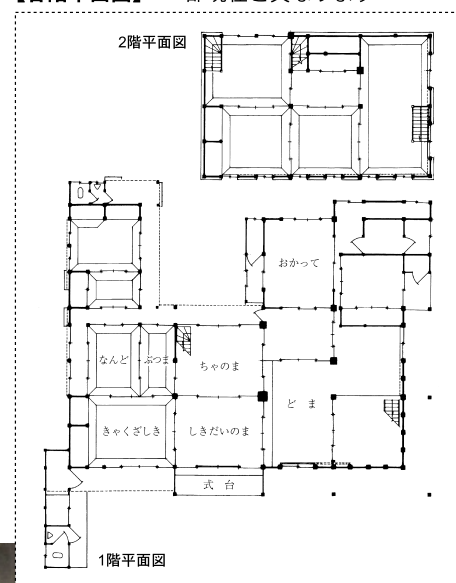
▼関東大震災以前の主屋写真を
デジタル合成で彩色したものです。



〔旧中村家住宅の概要〕

■主	屋	1棟	木造2階建	延べ床面積	420㎡ (1階部分 334㎡)(2階部分 86㎡)
■長	屋	1棟	木造平屋建	床面積	88㎡
■敷	地	1筆	宅地	面積	1,869㎡

【各階平面図】 一部現在と異なります



中村家と国指定史跡勝坂遺跡

勝坂遺跡の調査の歴史は古く、大正15(1926)年にまでさかのぼります。その年の夏に、休暇で帰省した学生の清水二郎氏が、中村家当主であった中村忠亮(なかむらただすけ)氏の所有する畑に転がっていた多くの土器を見つけ、考古学者の大山柏(おおやまかしわ)氏に標本として渡したことが発端です。大山氏は、同年10月3日に、勝坂の地を訪れ、最初の発掘調査が行われました。多数の石器(打製石斧等)や、完全あるいは、それに近い土器と顔面把手その他多数の土器の破片を採集しました。このとき発見された厚手の土器が注目され、後年「勝坂式土器」として、中部・関東地方の縄文時代中期の指標となりました。

発掘した地点は、現在地から程近い勝坂遺跡A区隣接地にあり、「勝坂式土器発見の地」の案内板が設置されています。



旧中村家住宅 相模原市南区磯部1734番地

アクセス/JR相模線下溝駅下車「下溝」バス停から「相武台前駅」行きて「勝坂入口」バス停下車徒歩5分 ※下溝駅からは徒歩25分

<お問い合わせ> 相模原市教育委員会文化財保護課 042-769-8371